仏教文学研究

第一集

仏教文学研究会編

昭和三八年一月三〇日発行
昭和四一年四月三〇日第二刷

編集者　京都市北区小山上総町
大谷大学国文学研究室内
（西部事務所）仏教文学研究会
代表者　多屋頼俊

発行者　西村七兵衛

印刷者　同朋舎印刷所

発行所　法蔵館
京都市下京区正面烏丸東
振替京都二七四三番
電話(371)〇四五八・七三五一番

©Printed in Japan

序

研究のあらゆる部門に、それぞれの関係学科の必須な事は、改めて言うまでもない。関係学科などに負う、広く明るい視野と、鋭く深い洞察とに因って、研究は着々と向上する。その視野と洞察とは、多くは、人々の、読書と思索と見聞とに依存する。研究を専らとする者に取って、それらを、孤立させると、それらは、その存在理由を失う。即ち読書の伴わない思索は、流水に浮ぶ泡に似て、形象が消え易い。思索の伴わない読書は、盲人の撫でる象の如く、思惟が偏り易い。見聞は、読書と思索に、刺戟と昂奮とを与えて、研究意欲を促進させる。日本文学研究に当って、その関係学科中、重要なものの一つには、仏教がある。日本文学の母胎の研究、即ち、その社会史的研究に、仏教を無視しては、仏を作って、魂を入れないと同じである。

元来、仏教は、世間的なものなのに、一部の国文学研究者間には、出世間的に扱われ、とかく国文学との密接不可分の関係方面の研鑽が、一般に、消極的であり、ともすれば、敬遠せられる傾向が、顕著であった。あの、兼好法師の徒然草は、読者層が、厚く広くて普遍的であるのに、それに類似性の正法眼蔵随聞記は、殆ど、一般から、顧みられて居ない。鴨長明の方丈記も、広く愛読せられて居るのに、法然上人の登山状の如き名文は、愛読する者がないか、その名号さえ

知らない者が多い。嘆かしからずとせんやである。猶、親鸞上人・日蓮上人、その他の高僧・善智識の作文中、国文学の対象となすべきものも、少からず残って居る。又、法華経などの文体は、宇津保物語にも、若干は吸収せられた所がある。六や三十六の数字は、特に、天台四教儀などに因って普及し、六歌仙・六女歌集・三十六人集など、歌人群や歌集の名称にまで、採用せられるに至った。その他、仏教関係の、行事・儀式・作法等の如きは、国民の日常生活中に深く溶けこみ、国文学の中には、活気を帯びて生きて居る。故に、それらは、国文学研究者が、積極的に、当然知って居なければならない重大事項なのである。然るに、積極的に、それらを、見よう、知ろうとする意欲の旺盛な人が少く、徒らに見聞の機会をも、見逃がして居る場合が多い。「叩けよ、開かれん」なのに。須らく、それらを体得吸収すべき事は、その多少を問わず、吾々に、不可欠な一大事因縁として、究尽する必要がある。然るに、たとえば、九条錫杖でも、呪や印相の若干でも、又は、あり触れた被甲護身法でも、全く、風する馬牛も相及ばずの、無縁の国文学研究者も少くない。それらを理解しない事よりも、寧ろ見聞して知ろうとする積極的な研究意欲の消沈は、憂うべきかなである。

尤も、儒者などの中には、昔は、仏教を排斥する様な、偏した仏教観の者もあった。例せば、支那には、韓退之や欧陽永叔などは、最初から、仏教を嫌悪した様である。程子や朱子などは、禅語や禅録は読んだが、仏教を白眼して居たらしかった。日本の儒者でも、支那を尊崇する者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、批判も反省もなしに、只、支那に追随を事とし、仏教を無用としただけで、無用の用を理解しない者も、少なしとしなかった。それらの事実も、国文学研究者に、全然、無関であったとは、断言が出来ないであろう。いずれにせよ。その如き考え方は、偏見であり、且つ、無用の用を知らない固陋な思考である。

されば、それらの輩は、道元禅師が、正法眼蔵の三時業の巻首に

今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善悪を弁へざる邪見の輩には、群すべからず。

と、述べた様に、視野の広さを庶幾する国文学研究者は、偏見を持つその輩には、群すべからざるものである。又、空華老人、即ち釈諦忍が、その空華随筆、巻上に

鳥を獲るは、羅(みあ)の一目のみ。されど、一目は、羅にならず。他の多くの目はこれ、無用の用なり。

の意を述て居るが、国文学研究に、直接、関係がない如く、皮相的に仏教を見る者に、この「無用の用」は、箴言と言うべきであろう。

ここに本会は、仏教は勿論、国史・民俗・芸能等の研究に従事する人々と共に、仏教に親しみ、且つこれを知り、日本文学から、更に延いては、日本芸能・日本民俗などと、仏教とのあらゆる面の、接触や関係、及びその他万般の究明及び普遍化を念願して、発足したものである。仏

教と日本文学研究の進展と、未開拓関係の分野の開拓とに、多少とも寄与する事を標榜しつつ、今後、この方面の研究と調査の成果を、貧者の一燈の様に、世に送ろうとするものである。個人の研究と調査には、限度がある。因って、この同人等は、協力研究の必要をも、痛感して居る。幸にして、大方の協力支援と論難批判の下に、永く消えずに、いよいよ広く遠くを明るく照らす一燈たる日を、同人一同が、心から期待して居るのである。

昭和三十七年九月三十日

山岸徳平

目

次

序　山岸徳平　一
拈華微笑と笑拈梅花　山岸徳平　九
遊部考　五来重　三
天台教学から見た源氏物語　大久保良順　五一
釈教歌考——八代集を中心に——　岡崎知子　七九
平家物語に於ける仏教説話について　高橋貞一　一一九

宴曲と寺社
——宴曲はどうして鎌倉幕府下に成立したか——　外村久江　一五三
文学・仏教・中世をめぐる問題　榎克朗　一九一
法語文芸　菊地良一　二三七
絵解と本願寺聖人親鸞伝絵　福永静哉　二五七
親鸞に関する中世の一談義本　宮崎円遵　二七五
筆者紹介　三〇八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

拈華微笑と笑拈梅花

山岸徳平

一　はし書

この稿は、懐風藻の研究に関する、私の論考の一部である。類従本懐風藻には、巻末に、「五言　歎老」と題した、亡名氏の詩が載せてある。但し、蓬左文庫蔵本で、もと徳川家康が所持して居た、言わゆる駿河御譲り本の如き古写本や、流布の版本には、その「五言　歎老」が、載せてない。その点にも、私達は、適切な考慮を払わねばならない。然るに、この亡名氏を、懐風藻の撰者と考えたり、甚だしいのは、亡名氏は即ち、中宮少輔である葛井連広成と見る者もあった。然し、それは全くの妄説で、問題にならない。先ず、この「五言　歎老」を、繰返し読むと、それから受ける感触とも称すべきものは、懐風藻の作品と、甚だしく遠い。それは、古体と今体との詩に、常に親熟し、その方面の感覚の訓練を経て居る人には、恐らく、容易に気がつくであろ

う。又、その詩の中にある「笑拈梅花坐」の一句が、懐風藻時代の作品に出て来る事には、大きな疑問がある。尚、この句は、禅宗で重要視して居る「拈華微笑」と、密接な関係を持つ事も、自ら明瞭なのである。

今、作品に対する感触や、古体の詩との比較の面は、別問題として省略し、ここに「拈華微笑」の句の出典を検討しながら、この「笑拈梅花」の句に連関して考察を及ぼして見る。それを結果から言えば、「五言　歎老」は、足利時代に五山の僧などの試作したものである事となる。且つ、これは、一首でなくて、二首であり、初めの一首は、結句を欠いて居る。次の一首は「歎老」の詩ではない。即ち、「京都五山の或る寺か、若しくは、五山でなくても、禅宗寺院中の、詩に嗜みのある僧が、懐風藻の巻末に、試作を書込んで置いたものであろう」と言う事になる。換言すれば、落書きして置いた詩なのである。そんな書込みのある本文を、類従本は、底本に採用した。そのために、案外つまらない詩二首が、一首と見誤られる様になった。のみならず、懐風藻撰者の詩であるとまで、誤解せられるに至ったのである。

繰返して言えば、「五言　歎老」は、足利時代に、京都五山、乃至は五山以外でも、禅宗寺院の僧の試作に過ぎないと言う事である。

ついでに言うが、「拈華」の「拈」は、言うまでもなく、音は、「デン」「ネン」で、訓は「ツマム」「ヒネル」である。けれども、「ネン」の音が通用していて、「拈華（ゲン）」と言う。これ

は、「華をツマム」と読むべきであるが、「華」を「ヒネル」と読む者もある。「拈華」の外に、「拈香」の語は普通であるけれども、臨済慧照禅師録、即ち臨済録には「棒をツマム」意味で、「拈棒」の熟語も見える。ちと、きたない話で恐縮至極であるが、固くて棒の様な屎（もく）を、田舎に、「拈棒」と言う所もある事を附記して置く。

二　拈華微笑の出典

禅宗は、言葉や文字を借らなくて、直接に、仏心を会得する事、即ち、「以心伝心」で教内の真伝を伝えると言う。それが、この宗の教旨である。つまり座禅直覚に拠って、宇宙の実在を認識すると言う事である。故に、「教外別伝」と言う事が、教内の真伝なのである。「拈華微笑」は、その「以心伝心」を具体的に述べた、一つの説話であった。その出典は、大梵天王問仏決疑経の初会法付嘱品第一である。この経典は、別名を、正法眼蔵涅槃妙心経とも、付法正法眼蔵経とも称せられる。童問日用集に拠れば、無着は「慈覚大師将来」と記している。但し、慈覚大師将来目録には、載って居ない。無着は、言うまでもなく、建仁寺の僧で、禅林象器箋などの著もあって、この宗門の学者であった。それが、何に拠って「慈覚大師将来」と記したかは、明示して居ない。けれども、その様な伝承でもあったのであろうか。この経典の内容は、二十四品のと、二十五品のとがある。後者は、第二十三品が、百字品になっているが、前者には、それがな

い。無着の見たのは、前者であった。いずれにしても、禅宗の僧達の間ですら、この経の事は、十分に検討せられて居ない。それは、一見する機会にも恵まれず、従って、十分に研究する事が出来なかった事と、昔から、偽経と軽視せられて居た関係とで、研究の意欲が起らなかったのかも知れない。多くは、風説に従って、この経を論じて居る様にも見える。即ち、建仁寺の面山は、その著にかかる大智偈頌聞解に、

大梵天王問仏決疑経モ、支那ニ風説バカリ。題号ハアリテ、経ハナシ。王荊公ガ見タト、宗門雑録ニアルモ、禅林ノ妄説ヨ。日本ニ、コノ経アルハ、洞宗ノ僧ノ偽作ナリ。

と述べた。即ち、曹洞宗の僧の偽作と、きめつけたのである。恐らく、風説だけを聞いて、この経を見た事が無かったのであろう。そうでなければ「経ハナシ」とは言わないと思う。又、伊予の椎禅は、その著にかかる禅林住持訓に

禅家亀鑑云。世尊、三処ニ心ヲ伝フ。三処トハ、多子塔前ニ半座ヲ分ツト。霊山会上ニ拈華スルト。雙樹下槨ニ雙趺（両足である）ヲ示ストナリ。

霊山拈華ハ、世尊、昔、霊山会上ニ在ツテ、大梵王献ズル所ノ一枝ノ花ヲ拈ジテ、衆ニ示ス。衆、皆、黙然タリ。唯、迦葉尊者、破顔微笑ス。世尊曰ク、吾ニ、正法眼蔵・涅槃妙心・実相無相・微妙ノ法門アリ。不立文字・教外別伝ナリ。摩訶迦葉ニ付嘱ス。（大梵天王問仏決疑経ニ、出ヅ。此ノ経、避ケ諱ム所アル故ニ、蔵ニ入ラズト、山庵雑録ニ見エタリ）（この「避諱云々」

は、帝王の事を記して居るからと言うのである。）

と述べた。その外には、釈諦忍も、その空華随筆、巻上に、「梵王問仏決疑経」と題して二項目を立て、この経は、大蔵目録にも載せず、請来の祖師もない所から「中古、倭人ノ作タルハ、疑ナシ」と見た。その中古とは、どの時代を指すのか、明確を欠くが、鎌倉か足利時代を、漠然と言ったものであろうか。更に又、この経典の性質に就いては、

ソノ義旨ハ膚浅、ソノ文字ハ倒置、殆ド看ルニ堪ヘズ。……支那・日本ノ黄口ノ禅和、強ヒテ、教外別伝ノ本拠ヲ求ム。……禅宗ソレ頽レタリ。

と見下した。現代でも、望月信亨博士の仏教大辞典には、「本邦の禅徒が、かの人天眼目の記事に基づき、更に妄作せるもの云々」として、同じく、この経典を、価値のないものの様に軽視してある。然し、この証明は誤解である。望月説は、当然、訂正せられなければならない。何となれば、日本禅の伝来以前に、日本に既に「拈華微笑」関係の記事が、存在して居たのであったからである。それは、栄華物語の「玉の飾」の巻の次の記事である。即ち藤原道長が、釈迦像百体を造った条に

皆、百体の御前に、仏具据ゑて、花奉り、十弟子の、さま〴〵の心地どもも、その折、思ひやられて、笑ましくも尊くもあり。迦葉の、口の中に笑みを含める程こそ、をかしけれ。

と記してある。「玉の飾」の巻は、栄華物語中では、続篇の部分に属して居るが、それでも、堀

河・鳥羽帝頃に成立したものの様に見られて居る。従って、この「拈華微笑」に関する事実は、少くとも、後三条帝時代前後には、日本にも流布して居た事が、明確である。その頃はまだ、日本に禅徒は無かった。従って、「日本禅徒の妄作云々」の如きは、妄説となるであろう。

ともあれ、この経典は、続大蔵経の第八七套・印度撰述第四所収であるが、勿論、印度撰述ではない。いずれにしても、その第一品中に、次の如く述べてある。

ソノ時ニ、大梵天王　即チ、若干ノ眷属ヲ引イテ来ツテ、世尊ニ金婆羅華ヲ献ジ奉リ、各々、仏足ヲ頂礼シ、退イテ一面ニ坐セリ。ソノ時ニ、世尊、即チ、献ジ奉レル金色婆羅華ヲ拈ジテ、瞬目揚眉シテ、コレヲ大衆ニ示シタマフ。是ノ時、衆、黙然トシテ措クコトナシ。独リ、迦葉尊者アリ。破顔微笑セリ。世尊言ハク、我ニ、正法眼蔵・涅槃妙心アリ。即チ、汝ニ付嘱ス。汝、能ク護持相続シテ、断タザレヨト。

これが「拈華」と「微笑」の語の並記せられた初見となっている。只、「拈花」だけならば、臨済録の行録の条にも見える。即ち、慧照禅師義玄が、杭州の大慈山に、寰中禅師を訪うた。その時の寰中禅師の言葉に「寒松一色、千年ノ別、　野老、花ヲ拈ズ。万国ノ春」などとある。これは、「拈花微笑」とは別であるが、これらから、「拈華微笑」などの語にまで、発展したかも知れないと、思われないでもないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com